宮城の地域資源探訪

蔵　王

●蔵王連峰

蔵王は、熊野岳（1,841m）を主峰とし、宮城・山形両県にまたがる新旧火山群の総称で、蔵王山という単独峰はなく、一般的には山形県側の瀧山から地蔵山や熊野岳、馬の背と呼ばれる県境の鞍部を経て宮城県側の刈田岳や屏風岳、不忘山などに至る北西から南東方向に連なる峰々を指して“蔵王”と呼んでいます。また、広く県境の雁戸山や名号峰、舟引山などを含む場合もあります。

古くは刈田嶺や不忘山（わすれずのやま）などと呼ばれ、信仰の山として崇められていましたが、各地で修験道が盛んになった7世紀末頃、吉野の金峰山（きんぷせん）（奈良県）から勧請（かんじょう）した蔵王権現が山頂に祀られたことに由来して、修験者が道場としていた周辺の山々を蔵王と呼ぶようになったと伝えられています。

蔵王は那須火山帯に属する活火山で、約100～70万年前に噴火活動が始まったとされており、約3万年前には、熊野岳や刈田岳、馬の背などが形成されたものと考えられています。その東側には直径約2kmの馬蹄形のカルデラが形成され、火口湖のお釜などは、約2千年前からのカルデラ内部の活動で作られたものと推定されています。

○勧請：神仏の霊を請い迎えること。

【　コ　ラ　ム　】

～国定公園～

国定公園は、国立公園に準ずる優れた自然の風景地で、自然公園法（昭和 32 年）により定められた公園のことをいいます。関係都道府県からの申請に基づき、環境省が、中央環境審議会の意見を聴取の上、区域を定めて指定します。公園の管理は当該都道府県が行うこととされています。

平成 19 年現在、全国では 56 地区、総面積約 13,615 ㎢（国土面積の 3.6%に相当）が指定されており、宮城県関係では蔵王国定公園の他、昭和 43 年に栗駒国定公園（大崎市、栗原市、一部岩手・秋田・山形各県）、同 54 年には南三陸金華山国定公園（石巻市、気仙沼市、登米市、女川町、南三陸町）が指定されています。

蔵王国定公園の指定区域は 39,635 ㌶で、うち宮城県分は 20,757 ㌶となっています。

●蔵王国定公園

蔵王国定公園は、宮城県側の仙台市、白石市、川崎町、蔵王町、七ヶ宿町、山形県側の山形市、上山市にまたがる広大で本格的な山岳公園となっています。蔵王一帯とその北側に位置する面白山一帯を含めて延長は40kmに及び、新旧の火山群によって形成された荒原や湿原、渓谷や瀑布などの絶景のほか、丘陵地帯から高山帯に至るまでの植物相の変化など、多彩で雄大な山岳景観を有しています。高山植物のコマクサなどをはじめとする様々な植物群落が存在するほか、特別天然記念物のニホンカモシカや天然記念物のヤマネなどが生息していることから、自然環境を保護するため1947（昭和22）年に県立自然公園に指定され、1963(昭和38)年にはその主要部分が国定公園に指定されました。

国定公園指定に前後して蔵王エコーライン、蔵王ハイラインが開通したことから、多くの人々が火山活動により作られた荒原や高山植物などに接することができるようになりました。刈田岳山頂やお釜、コマクサが群生する駒草平、滝見台、賽の磧（さいのかわら）などの見どころが数多く、春の雪の回廊、夏の新緑、秋の紅葉など、季節ごとの景観が訪れた人々を魅了しています。

蔵王のシンボル“お釜”

写真提供：宮城県観光課

●お釜

蔵王のシンボルお釜（湖面の標高1,550m）は、連峰中央部の最も標高の高い地域にあり、釜のような形をしていることからお釜と呼ばれています。特徴的なエメラルドグリーン色の湖水を湛えた湖面と、周囲の荒々しい火口壁とのコントラストが人々を魅了しており、湖水の色が季節や天候によって様々に変わることから五色沼とも称されます。

お釜は、有史以来の蔵王の火山活動の中心で、これまでに26回の噴火が記録されており、最も新しい噴火は1895（明治28）年に発生しています。その後、大規模な火山活動は起きていませんが、噴煙や鳴動、地震群発などの活動が現在も記録されており、気象庁や東北大学等により地震や火山ガス、地温などの観測が続けられています。

お釜の湖水は、水温が表面から十数メートルの深さで摂氏2℃まで下がり、さらに深くなると温度が高くなる特殊双温水層という世界的にも珍しい構造となっています。また、強酸性（pH3.5）のため、生物は生息することができない環境となっています。1939（昭和14）年の計測時には深さが63mでしたが、その後、五色岳断崖の崩壊などによって徐々に埋まり、1968（昭和43）年の計測では、周囲1.08km、東西径323m、南北径325m、最大深度27.6m、平均深度17.8mと記録されています。

【　コ　ラ　ム　】

～エコーライン・ハイライン～

蔵王エコーラインは、蔵王を横断して宮城県と山形県を結ぶ宮城・山形県道12号白石上山線のうち、蔵王町遠刈田温泉から上山市坊平までの旧日本道路公団が管理していた部分（延長26km、宮城県側12km、山形県側24km）の愛称で、1962（昭和37）年11月、山岳観光有料道路として開通し、1985（昭和60）年7月に無料開放されました。なお、冬期間（11月初旬～4月下旬）は雪のため閉鎖されます。

蔵王ハイラインは、エコーラインの最高地点の刈田峠から分岐して刈田岳、馬の背に至る民営の有料道路（全長2.5km）で、1964年9月に開通しました。終点には駐車場と県営のレストハウスが整備され、お釜観光や刈田岳山頂の刈田嶺神社参詣などに利用されています。

●樹氷

蔵王の冬のハイライトである樹氷は、①アオモリトドマツなどの枝や葉に雪雲の中の過冷却水滴（0℃以下でも凍らない雲粒）がぶつかって凍り付き、②その着氷の隙間に多くの雪が取り込まれ、③過冷却水滴が糊の役目をして雪が互いに接着して固まる、という現象が繰り返されてできるもので、蔵王や八甲田、八幡平など、樹氷ができるための特殊な条件を備えた一部山域でしか見られないとされています。冬場の季節風によって独特の姿が造り出された樹氷はスノーモンスターとも呼ばれています。宮城蔵王では過冷却水滴が小さいことから、特にきれいな樹氷ができるといわれています。

宮城蔵王の樹氷観賞は、交通手段がスキー場までしかなかったことから、以前は冬山登山者や一部のスキーヤーなどに限られていましたが、現在は雪上車を利用して観光客などが気軽に樹氷原を訪れることができるようになり、冬の観光の目玉として人気となっています。

かつて信仰の山として崇められた霊峰蔵王は、夏場はお釜の奇観や高山植物、冬場は樹氷やスキー、そして年間を通じて楽しめる温泉など、豊かな自然環境に恵まれた宮城県の代表的な観光資源の１つです。貴重な自然の恵みの着実な維持・保存が図られるとともに、これからもより多くの人々に親しまれ、観光振興など地域の賑わいへの一層の貢献につながることが期待されます。

宮城蔵王の樹氷

写真提供：宮城県観光課

（参考資料）

・宮城県ＨＰ　・蔵王町ＨＰ　・日本地名大百科（小学館）　ほか